

にーだんご



発行：くにたちの暮らしを記録する会

(佐伯安子)

国立大学町創成期から、

このまちに住み続けて

服部いづみ

ご近所にお住まいだった
岩下 進さんから十年前に
伺ったお話です。

遊び相手がいなかった幼少時代
国立の今住んでいる処で生まれ、
育てられて、今に至ります。
国立のこの地以外に住んだこと
がありません。逗子ホテルの料
理人だった親父（亀太郎）が東
京高等音楽学院（現国立音楽大
学）の教職員専属料理人として
やって来たのが、昭和四年（1
929年）。

その翌年に私が生まれました。
ちようど国立駅ができて間もな
い頃だと思っています。

ウチは「国立堂」という本屋
の跡に移り住み、お袋がそのま
ま国立堂という名で菓子屋を始
めました。国立のまちが誕生し

たばかりで、富士見通りも駅近
くには数軒のお店があったもの
の、今の公民館辺りからウチま
では、一軒ありませんでした。
国立学園と国立音大の間には、
ウチと黒田写真館、それに牡丹
園があっただけです。

近くには子どもがいる家がな
く、遊び相手がいないので、ウ
チの横を南北に通る路の端にあ
った日本興業銀行や安田銀行の
両グラウンド管理人の家に居た同
級生や兄妹たちと遊んでいまし
た。

昭和一五年（一九四〇年）頃、
富士見通りにはじめて1軒家が
できて、同級生とその兄弟たち
と、砂利道の富士見通りで「缶
けり」をして遊んだのが、小学
生の頃のいい思い出です。

戦後、職を求めて、外のまちへ

終戦の直前、杉並中学の3年
だった私は、三鷹にあった中島
飛行機の下請け工場へ勤労働員
され、そこで零戦のエンジンの
鋳型に線を引く、「罫書き」と

いう仕事をやっていました。

午前・午後の休憩時間、各自
が好きに旋盤で削ったペーゴマ
で遊んでいました。お昼休みも
空襲警報の無い時はペーゴマで
した。

毎日、国民服を着て鉄兜を背
負って電車に乗り、大人みたい
に働くわけですから、何か遊び
がなければやり切れなかったで
しょうね。

戦争が終わって、国立のまち
が活気づいてきたのが、昭和二
三年（一九四八年）頃からです。
辺りの土地所有者が土地を手放
すようになったからでしょうね
住宅も増えてきました。それ
に合わせて、建築関係の店舗が
でき、八百屋、肉屋、魚屋の生
鮮三品は各々2軒ずつと生活関
連のお店が色々揃ってきまし
た。

私はというと、商店会には関
わらず立川の米軍基地で働いて
いました。終戦後まもなく米軍
が進駐してきたので、矢川駅近
くのニコヨン（日当二四〇円で
働く労務者）を斡旋している人